

飯塚ひろみ著 『源氏物語歌ことばの時空』

(翰林書房刊、平成二十二年十一月)

安 永 美 保

本書の紹介の前に、著者について触れておこう。著者の飯塚ひろみ氏は本学（同志社女子大学大学院文学研究科日本語日本文化専攻）のご出身であり、二〇〇九年同課程修了と同時に学位を取得されている。この時提出された課程博士論文『源氏物語』歌ことばの時空——百敷・水鶏・女郎花から迫る

——が、〈あとがき〉で著書ご自身が述べているように、本書のもととなっている。書評の主旨とはずれるが、この飯塚氏への学位授与は日本文学の分野からは本学初である。このエピソードは著者の先駆者的な性格を物語っており、学術的な貢献はもちろんのこと、研究者としての精神的資質が窺える。ここまで、偉そうなことを書いてしまったが、この書評なるものを

書いている評者は、著者と同じく吉海直人先生に師事しており、後輩にあたる。本来なら書評を書くなどおこがましい立場であり、先輩の胸を借りるつもりで筆を執ったが、公明正大を旨とする飯塚氏であるので、この場合は文学研究に従事する者として忌憚なく見解を述べたい。

本書を読み解くキーワードは、その表題にあるように「源氏物語」「歌ことば」「時空」であるだろう。一つ目の「源氏物語」については、ここで説明する必要はないが、後者の二つについては個人によって見解が異なるだろうから、著者の言を借りて、最初に整理しておく。まず、「歌ことば」について著者は、「この〈歌ことば〉について小町谷照彦氏は〈歌ことばと

は単なる語彙としての歌語に留まらず、統括的な意味での和歌言語であつて、和歌、引歌、歌語、仮名散文における縁語的表現や歌語を用いた自然表現や心情表現など、一切の和歌のことばや表現を含む(『王朝物語の歌ことば表現』若草書房・一九九七年)と定義された。本書でいうところの(歌ことば)も、基本的にはこの定義に従いたい。(8頁)と述べている。この小町谷氏の定義に著者が従うことは、一つ目のキーワードである「源氏物語」とすりあわせて調査を進める上で非常に有効である。従来の研究史において、『源氏物語』の言語体系が和歌や古歌由来の引歌に深く影響を受けており、それらの方面から文学研究にアプローチする手法はしばしば採用されてきた。こういった手法は研究の土台であり、重要であることは間違いない。しかし、この手法のみに傾倒するのは、散文中に無数にある古歌表現から漏れた「新しい歌ことば」を放置する恐れがある。これは、三つ目のキーワードである「時空」とも関連するが、「歌ことば」は用いられる時代や環境等に左右され変容するもので、決して一定の形で留まっていることはない。『源氏物語』だけが特殊な言語体系をしているなどと言うつもりは毛頭ないが、著者の「すなわち『源氏物語』は、歌ことばの働き

を従来の和歌世界の再現にとどめることなく、物語独自の機能も作り上げているのである。」(9頁)という言は和歌文学研究に留まることなく、『源氏物語』研究に応用することで、その特殊性を明らかにするという学術的な貢献度の高さを示唆している。次に三つ目のキーワードである「時空」について、著者は『源氏物語』の時空といつても、それは、歴史上における『源氏物語』が書かれた時間や空間を指す場合と、『源氏物語』の内部の時空間構造を指す場合に大別される。前者を主眼とした研究は史実と関連つけた準拠論やモデル論にあり、後者のそれは登場人物の系図や年立の確定を目指してきた。そして、これらはそれぞれが完全な独立独歩ではなく、時として両者をすり合わせ、あるいは融合した大きな時空間認識を生成してきた。りがって、『源氏物語』内部と外部を統合させた大きな枠組みの(時代意識)もまた、『源氏物語』の時空と呼ぶことができる。(11頁)と述べている。ここまで読んだ時、歴史学にも造詣が深い著者であるから、前者の史実と照合する手法をもって、『源氏物語』が執筆された時空間を対象としたのだらうと、浅薄ながら筆者は思考した。しかし、著者は『源氏物語』の歌ことばの特殊性を明らかにするために、『源氏物語』の作

者である紫式部が生きた現実世界の歌ことばに着目したのである。著者が資料として用いたのは『紫式部日記』や『紫式部集』等の日記や歌集である。これらの資料はつくり物語の中に展開される架空の三次元世界を、現実世界の三次元世界と比較する重要な資料と言えよう。このように、本書の概観は「源氏物語」という虚構世界と、それを書いた紫式部が生きる一条朝の現実世界を「歌ことば」という指標をもつて比較検討し、各々の「時空」を認識した上で初めてわかる新解釈を提唱している。以下に、本書の目次をあげる。なお、各章中の小見出しは割愛した。

序 歌ことばと時空

I 物語の黎明——〈時代〉を担う歌ことば——

第一章 百敷の文学史 平安朝の位相——九重との対比から——

第二章 『源氏物語』における「百敷」の時空

II 水鶏の鳴く夜——『源氏物語』と道長歌の綾——

第一章 水鶏の文学史——平安期の和歌にみる「水鶏」

第二章 『源氏物語』の「水鶏」をめぐる

第三章 「月入れたる真木の戸口」考

III 女郎花の咲く朝——野辺の花から六条院の華へ——

第一章 女郎花の文学史——命名と移動——

第二章 夕霧の物語と女郎花

第三章 『源氏物語』女郎花の系譜——六条院の華として——

IV 交錯する時空——衣装と記憶——

第一章 『源氏物語』の植物と衣装

第二章 浮舟の「袖」——〈きぬぎぬ〉の記憶——

第三章 「袖ふれし」歌と〈紅梅〉

第四章 重なる衣——浮舟最終詠が再現する色目——

初出一覧

あとがき

索引

目次をみると、本書は序ならびに、I II III IVの五部構成になっている。序では、すでに触れたように、「歌ことば」「時空」について著者の定義を、研究史を踏まえて解説している。

I・II・IIIはそれぞれ「百敷」「水鶏」「女郎花」といった歌ことはを指標として取り上げて、それぞれの歌ことは文学史上はどのように処されてきたかを詳細に考察したあと、『源氏物語』の中での特殊性を考察している。ここではI・II・III部を、各部分立てごとに順番を追って見ていきたい。

第一部「物語の黎明——〈時代〉を担う歌ことは——」では、「百敷」という表現から、『源氏物語』の作中人物の心象風景に切り込むことに成功している。「百敷」に対する一般的な理解は「宮中」を示す表現である。和歌中に用いられる「百敷」については順徳院歌を筆頭にこれまでも研究がなされてきた。一方で『源氏物語』の中に「百敷」が使用されていても、和歌での使用ではないので、考察の対象になるような表現ではなかった。そのような看過されてきた「百敷」に著者は注目したのである。しかも、単に「百敷」の位相を調べただけではない。同じく「宮中」を示す表現である「九重」との比較もつて、使用法を明らかにしている。『源氏物語』の中に「百敷」は三例あり、「九重」は七例ある。ほぼ同様の意味を持つこの二つの表現には、使用法の上で思いもよらない隔たりがあった。著者は「例外はあるものの（九重）は概ね宮中に慣れ親しんだ

者同士で用いられる語だと推定されよう。翻って〈百敷〉の用例は、宮中に行かない者が宮中に入りする者に対して用いていたことになる。」（48頁）と述べている。物語の作中人物たちの「百敷」と「九重」の使い分けを明らかにしているのであるが、著者の考察は物語中の三次元世界を現実の三次元世界との比較をもって、さらに検討を加えている。著者は『蜻蛉日記』や『枕草子』には〈九重〉のみが用いられている。両者の書き手が想う〈宮中〉は決して過ぎ去った時代のそれではない。自分自身の〈現在〉を生きる彼女らは、〈現在〉の宮中を〈九重〉で語るのである。」（58頁）と述べた上で、紫式部が「九重」ではなく、敢えて「百敷」を用いた意図を、「それは、発せられると同時に時空をゆがめ、登場人物の記憶の中に浮遊する〈過去の宮中〉へとつながってゆく。『源氏物語』の「百敷」は、〈物語の過去〉を担いつつ、過去の繁栄とのギャップを露呈させる歌ことばといえよう。」（58頁）とまとめておられる。

第二部「水鶏の鳴く夜——『源氏物語』と道長歌の綾——」で主に扱う「水鶏」は、著者によると一条朝に活発に用いられた表現である。しかも、藤原道長や和泉式部といった紫式部の周辺人物達の中で集中して用いられており、ある特定の年代・

場所・階層の中で「水鶏」には、多様な解釈が付与されていた可能性を著者は示唆している。一章ではこれら歌材としての「水鶏」について再定義を施しており、「従来の（i）待ち人意識」に加え、ii特殊な鳴き声を利用して技巧を競った（言語遊戯）、…iii待ってもいないのにならなくてきて鳴くという（諸譚）、ivどうせ水鶏しかやっつてこないという（諦念）も併せ持つ語であるといえる。（80頁）としている。二章ではこういった「水鶏」の新定義をもとに、『源氏物語』中の「水鶏」の真の役割について論をすすめている。著者によると、『源氏物語』中の「水鶏」は全四例あり、「明石」「濔標」の二巻に限定された使用である。なかでも、「水鶏」は花散里の周辺に用いられており、著者はこの「花散里（邸）と水鶏」の組み合わせに疑問を投げ掛けている。そもそも、花散里巻を代表とする鳥は「時鳥」であり、『源氏物語』の「時鳥」の用例全十一例の約半数が花散里巻に集中している。この「時鳥」と関連して使用される「五月雨」を著者は合わせて検討し、「花散里―橘―時鳥―五月雨」という連想が成り立つ『源氏物語』の中で、濔標巻では（花散里―五月雨―水鶏）の取り合わせになるのである。（93・94頁）と濔標巻の「水鶏」の特異性を述べておられる。

濔標巻の「水鶏」の役割を紐解くキーワードとして、著者が注目したのは「月」である。花散里・須磨・濔標巻には鳥と共に「月」が描かれている。この鳥と月の組み合わせが、一見、関連性の薄い三つの場面を貫くモチーフとなっている。花散里巻では「時鳥と月」が描かれ、須磨巻と濔標巻では「（水）鶏と月」が描かれている。この鳥の種類の変遷に、著者は紫式部の意図を読み取っており、「水鶏の役割は、女御に替わって妹の花散里のもとに源氏を導くことであった。そしてそのことは、花散里を源氏の妻としてあらためて据え、後に榮華の象徴となる六条院を築いてゆく光源氏の物語の始まりであると位置づけられる。」（102頁）とまとめている。これらの考察は「水鶏」という歌材が一条朝に勃興した新しい表現であったこと、それに対して「時鳥」は、古今集や万葉以来の懐古的性格を持つ表現であったことを明確にした著者ならではの新解釈であろう。

第三部「女郎花の咲く朝——野辺の花から六条院の華へ——」では、歌ことば「女郎花」の特質を明らかにした上で、『源氏物語』世界の「女郎花」に付与された役割を、系譜をもって立証している。一章では歌ことばの「女郎花」を「前栽掘り」を起点として、「女郎花」に対して、人々のもつ心象に

言及している。著者は野から貴族の庭に「女郎花」を移し植える行為に対して、「それはあたかも若に大勢いる女性たちの中から好みの女性を連れ帰り、自己の領域に囲い込む享樂のようなものである。歌ことば（女郎花）は、このような男性心理の密やかな楽しみと親密な関係にあり、男性の間でいわば隠語のような機能をもっていたのだともいえよう。」（183頁）と述べている。ここから、歌ことばとしての「女郎花」は男性視点の要素を多分に含んだ表現であることがわかった。二章では『源氏物語』の「女郎花」が歌ことばとは異なる様相をみせることを扱っている。著者は『源氏物語』夕霧巻と野分巻周縁の「女郎花」を解釈する上で、「前栽掘りを行う男」を光源氏と夕霧に、「女郎花にたとえられる女」を玉鬘と落葉宮に設定している。著者は女性を「女郎花にたとえた人」に注目した。玉鬘の場合は自らの境遇を「女郎花」に投影した歌を詠んでいるし、落葉の宮の場合は母御息所が娘に対する夕霧の行為に抗議する思いから「女郎花」を詠みこんでいる。つまり、『源氏物語』の「女郎花」は女性詠であり、歌ことば「女郎花」の用法からは外れるのである。これについて、著者は「夕霧の物語では、和歌世界で男性本位に弄ばれてきた女郎花を、逆に女性が利用して男を

動かす効果が得られている。」（176頁）とまとめている。著者は歌ことば「女郎花」のイメージを逆手に取った手法が『源氏物語』の中で用いられていることを明らかにしたが、著者の本領は三章に発揮されている。三章では夕霧の娘であり、落葉の宮の養女各である六の君に「女郎花」が投影されていることを宿木巻の用例を中心に論じている。ここで、「女郎花にたとえられる女」「前栽掘りをした男」「女郎花にたとえた人」「女郎花によって誘引される男」の役割を誰が担っているかを確定しておきたい。いうまでもなく、「女郎花にたとえられた人」は六の君であり、「前栽掘りをした男」は夕霧巻と同様に夕霧である。残る「女郎花にたとえた人」「女郎花を詠んだ人」は夕霧巻では自身が「女郎花にたとえられた人」であった落葉の宮であり、「女郎花によって誘引される男」は匂宮である。宿木巻の「女郎花」をめぐる人々の配役を見ると、夕霧巻の「女郎花」の周縁にいた人物との重複がみられる。これについて、著者は落葉宮を「夕霧による六条院復興記念の植樹」（189頁）と形容し、六の君が植樹によって六条院に開花した「次代の女郎花」（189頁）と述べている。さらに、「女郎花によって誘引される男」に据えられた匂宮とは対象的に「蜻蛉巻」で「女郎花に排

斥された男」として描かれる薫の構図も同時に見出だしていることは興味深い。これらの「女郎花」をめぐる物語世界の構築について、著者は「『源氏物語』続編は、夕霧巻を序章とする夕霧の物語としても読める。」と述べている。「女郎花」を経由して作中人物たちは配役を与えられ、六条院という舞台に立っているという読みは、次代の主役を〈光源氏↓薫〉とする見解は〈書かれた物語〉にすぎず、光源氏由来の「女郎花」の系譜からは〈光源氏↓夕霧↓匂宮〉を主役に六条院世界を舞台とする〈書かれなかつた物語〉を浮き彫りにする。「女郎花」の系譜は新たな読みの可能性を広げるものなのである。

以上、Ⅰ―Ⅲ部の外観について私見を交えて紹介してきた。さらに、私見を述べると本書の目玉はⅢ部「女郎花の咲く朝——野辺の花から六条院の華へ——」であると思う。Ⅰ―Ⅲ部で一貫して行われている「百敷」「水鶏」「女郎花」といった指標を『紫式部日記』や『紫式部集』に代表される同時代の日記や歌集の用例との互換性を活かして、三次元的な時空として捉えた物語の中で引用する手法は、斬新である。なかでも、Ⅲ部にいたっては「女郎花」の系譜を樹立するにいたっており、物語世界の時空と現実世界の時空を多角的に捉えた著者のなせ

る技である。敢えて、不安があるとすれば、「百敷」「水鶏」「女郎花」といった指標の『源氏物語』中にみられる用例数の少なさではないか。用例数の少なさというのは長編作品の中で指標が占める割合のことではなく、一つの用例から全てを論じてしまうことを指す。数量的に少ない指標の中からさらに重要なものを絞り込む作業は困難を伴う作業であるが、論に用いなかた用例はどのように処すべきか。しかしながら、この問題は本書に限らず、指標をもうけて論を進める形式の研究方法をとる者には最後まで付きまとう課題である。評者はこの課題を打破する最善策は論の数を増やすことだと考えている。評者は飯塚氏の御著書は一つの研究方法を切り開くものであり、今後の研究への広がりも期待できる好著であると拝読した。最後に断わっておくが、評者の見解は著者の意図するところと異なる誤読があったかもしれない。読者の皆様には、その点もご留意いただいた上で、是非本書を通読されることをお勧めしたい。

(二〇二一年十一月一日 翰林書房 A5版)

各二六八頁、四〇〇〇円(税別)